

北海道支部地方講演会の報告

当支部では、本年度第1回理事会において事業計画の一つとして、地方講演会を開催することが決定された。

これに基づいて、知識の普及と啓もうを目的として、その土地に関係の深いテーマを中心に、一般行政機関・学校・船舶関係者等で関心のある人達を対象にした講演会を企画し、下記のとおり実施した。

記

名称 「流水と気象の講演会」

日時 昭和53年10月14日 13.00～16.30

会場 網走市「まるせん会館」

講演会次第

- (1) 開会：播磨屋敏生 支部幹事長
- (2) あいさつ 孫野長治 支部長
あいさつ 網走市長
- (3) 講演（座長 小堀盤雄 網走地方気象台長）
 - i) オホーツク海流水の振舞い：赤川正臣（函館海洋気象台海上気象課主任技術専門官）
 - ii) 網走の海水と気象：佐田善雄（網走地方気象台予報官）
 - iii) 流水の下の海況変動について—宗谷暖流潜流—：青田昌秋・河村俊行（北海道大学低温科学研究所流水研究施設）
 - iv) 流水と海難：山田章夫（第1管区海上保安本部警備救難部救難課長）

なお、流水と海難は都合により、同課小野外也補佐官が講演した。

- (4) 閉会：播磨屋 幹事長

以上のとおりであるが、地方における講演会なので地元の網走地方気象台には多大の御協力をお願いした。また、地元の網走市には後援していただいた。ここに厚くお礼を申し上げる。

会の参加者は総計133名で会場を埋め尽し非常に盛会であり、地方においてこの種の講演会が待望されていることが感じられた。参加者は、遠く紋別市や雄武町からもあって地元のみでなかった。内訳をみると、官公庁の関係者が最も多く、大学・学校・漁協・船舶・報道等の関係者で広範囲にわたっていた。

参加者にはあらかじめ講演の予稿集を作成して配布し

たが、終了後も、参加できなかったので予稿集だけでも欲しいとの要望も多く、その反響は大きかった。このように成果をあげ得たことから見て、支部の事業として十分意義あるものであったと思われる。

この講演会の講演要旨は次のとおりである。

1. オホーツク海流水の振舞い

赤川 正臣

気象衛星による資料も増量し、オホーツク海の流水の動向は次第に明らかになってきた。

海水域の発達・衰弱の特徴が示され、その年々変動には気温の影響が大きいことを指摘した。また、流水の移動や氷の成長・融解の実態を示し、気象との関係を述べた。

オホーツク海に海水が存在することによる気象・海況への影響を論じ、その関連は単純なものではなく、時間的・空間的にいろいろな規模での関わり合いを持っていることを強調した。

流水は、オホーツク海地域住民にとっては生活・産業経済活動などの面で歓迎されるべきものではないが、流水の実態を知り、その変動を予測することなどによって、われわれの流水に対する対応を適切なものにしてゆくことが可能であろう。

2. 網走の海水と気象

佐田 喜雄

網走の海水季節は、平年値や極値順位等からみて年によりかなり変動が大きい。目視観測による網走沖の流水の増減には風系が大きく作用し、増加時は北～北西風系であり、減少時は南～南西風系である。また、気圧配置の特徴も増加時は冬型や南岸低気圧の通過等のように北～北西風系になるような気圧配置で、減少時は前線や気圧の谷の前面や移動性高気圧の南方通過のように南～南西風系になるような気圧配置が多い。次に流水の増減に伴う気温の変化をみると、増加時や接岸後は下降が著しく、減少時には上昇が著しい。また、寒冬には流水が多く、暖冬には少ない傾向がかなりよく現われている。

次に、流水によって最も影響を強く受ける産業は漁業

である。被害の程度はその年の流氷の状況により変動が大きい。漁業を中心とした関連産業全体の損害は年々莫大な額に上る。

3. 流氷の下の海況変動について—宗谷暖流潜流—

青田 昌秋 河村 俊行

オホーツク海は流氷の南限である。これは、オホーツク海の表層が軽い低塩分水で覆われ対流層が数十メートルに限られることと、シベリア大陸の寒気の流入が蔽しいためである。

水温が -1.8°C に達すると針状または板状の小氷片(氷晶)が発生し、この氷晶群は表面近くにたどよい泥氷となる。泥氷のため海面は鉛色のどろっとした感じとなる。さらに寒気が続くと、泥氷は板状軟氷へと発達する。この時期にはうねりのため軟氷はお互いにぶつかり合っ「はす葉氷」ができることもある。その後はうねりも消え、全面が $4\sim 50\text{cm}$ の氷野と化していく。

北海道沿岸に北方の流氷が到来するのは1月中旬で、3月中旬になると徐々に南下し、沖合へと去っていく。沿岸の流氷の下には宗谷暖流潜流が存在し、海明け期の氷の動きを支配している。

流氷の存在は、海塩核の発生阻止による沿岸植物の塩害防止、流氷中の藻類・プランクトンの増殖による漁業資源の増大などプラスの面も大きい。

4. 流氷と海難

山田 章夫

流氷海難は、オホーツク海、根室海峡で多発し、船体が流氷に閉塞されたり推進器や舵を損傷させたりする。主要海難としては、1912年大西洋において冰山と衝突し沈没した大型旅客船タイタニック号事件があり、これを契機として船舶の安全基準が国際的に統一され、わが国もこれに基づいて船舶安全法関係法令が整備された。また、昭和45年にはエトロフ島単冠湾にてわが国の漁船8隻が流氷のため全損となる集団海難が発生し、このため、第1管区海上保安本部内に流氷情報センターが設置され、流氷期には船舶に流氷情報が提供されている。一方、救助体制としては釧路に砕氷能力のある大型巡視船が就役し、また、航空基地も開設され、流氷海難等に対応させることができる。さらに、発生海域によっては日ソ海難救助協定に基づくソ連側への救助要請により、早期に救助手がなされている。

気象学会および関連学会行事予定

行 事 名	開 催 年 月 日	主 催 団 体 等	場 所
九州支部講演会	昭和54年 2月 8日	日本気象学会	福岡管区気象台
月例会「レーダ気象」	昭和54年 2月23日	日本気象学会	気象庁
月例会「航空気象」	昭和54年 2月23日	日本気象学会	東京国際空港(羽田)内 日本航空オペレーション センター第1・第2会議室
月例会 「長期予報・大気大循環」	昭和54年 3月 1日	日本気象学会	気象庁
日本気象学会総会・春季 大会	昭和54年 5月22日～24日	日本気象学会	気象庁
第16回理工学における 同位元素研究発表会	昭和54年 6月25日～27日		国立教育会館